

奏楽堂がわかる 6つのポイント

瀧井敬子

前身である旧奏楽堂以来の歴史から
ガルニエ社製パイプオルガンをはじめとする
建築・設備の魅力
そして今後の活動方針までを紹介する。

1

歴史と沿革

一九九八年（平成十年）に落成した現在の奏楽堂は、いわば「二代目」である。

一八九〇年（明治二十三年）、東京音楽学校本館の講堂として建てられた「一代目の奏楽堂」が老朽化したので、建て替えの問題が起った。一九七二年（昭和四十七年）、東京芸術大学はその古くなった奏楽堂を明治村に移築することを決め、新しい奏楽堂の設計に関して、「奏楽堂建設小委員会」を作った。しかし、一九七九年、日本建築学

会及び音楽家グループが奏楽堂の現地保存をもとめる要望書を文部大臣、文化庁長官、東京芸術大学長に提出した。それでも大学側の「奏楽堂建設小委員会」はコンサートホール新築のプランを練っていて事態は変わらなかったため、卒業生も加わった「奏楽堂を救う会」が結成され、明治村への移築に反対する運動はますます激しくなった。ことに音楽学部では激しい議論がしばらくつづいた。しかし、一九八一年になって台東区長から区内に移

築保存しようという申し出があり、これにより一代目の奏楽堂は上野公園内に移築され、一九八七年に復元が完成した。

こうして紆余曲折の末、文部省は新しい奏楽堂の建設を決定。大学内の委員会では、ホールのあり方で度重なる検討がなされた。当初、小ホールと中ホールを併置する計画もあったが、面積の関係で、一つのホールという現在の形に落ち着いた。パイプオルガンは、建物の完成後、一年余かけて設置された。

2

建物の特色

奏楽堂は面積が約二二七〇㎡、地下二階・地上五階、延べ面積が約六五四〇㎡。外壁は美しいレンガ張りである。きつと長年の風雪にも耐え、レンガはそれをも美しさの糧にするだろう。

ホールはシューボックス・タイプである。これは「奏楽堂建設小委員会」において白熱した長時間の議論のすえ決定された結果である。収容人数は一一四〇（一階席九五六、バルコニー席一八四、オーケス

トラピット使用時は一〇一八席）。狭い敷地ながら楽屋も充実していて、大小八室ある。その他にスタッフルーム二室、グリーンルームを備える。奏楽堂の最大のウリのひとつは「可変天井」である。客席の天井全面を最大五m上下することができる。これによってホール空間の容積を変化させ、残響時間も含めたホール全体の音響特性が変えられるのである。世界的にみても、これまで天井を部分的に上下させる試みはあったが、

この奏楽堂ほど広範囲に天井全体を上下できるホールはない。しかも天井は三分割されているので、三つ全体だけでなく、そのうちの二部分とか、一部分とかを変えることもできる。奏楽堂は管弦楽、管打合奏、オペラ、合唱、邦楽、室内楽、独奏、パイプオルガンなど、多ジャンルの演奏形式に対応することを目的にしている。この可変機構によって、それぞれに最適の音響特性を作り出すことができる。

3

パイプオルガンの特徴

オルガン設置にあたっては、まず、

の工夫がなされている。

オルガン科教官を主力とする委員会が組織された。つづいて、この委員会を中心にしてオルガン仕様のコンセプトが決められ、仕様書が作成された。これを「官報」を通して、広く世界のオルガン製作者たちに発信し、入札参加を呼びかけた。国内外から多数の応募があつたが、最終的にフランスのガルニエ社に決定した。

仕様のコンセプトに関しては、教育研究というのが大きなポイントであつた。そのため奏楽堂のパイプオルガンでは、ポリフォニックなバツハ時代のものから、現代音楽に至るまで、二つないし三つのタイプのものがうまく同居できるよう、構造上

パイプオルガンの製作工程に関し

ては、設置現場である奏楽堂にすべての部品を搬入して、そこで組み立て、しかるのち初めて音を出すというやり方がとられた。一九九八年十月、パイプの一本一本を削ることから始めて、組み立て、整音といった音を作りだすための作業のすべてが、奏楽堂内で行われた。マルク・ガルニエ氏は、ホールの音響空間とたえず対話をしながら製作をつづけた。オルガン作りの理想的なケースである。

奏楽堂オルガンストップ仕様の詳細については、芸大ホームページ <http://www.geidai.ac.jp> を見ていただきたい。



マルク・ガルニエ氏製作のパイプオルガン



「上野の杜」に建てられたレンガ貼りの外観

4

上野の自然空間との一体化

奏楽堂の入り口正面には平山郁夫学長の原画による織つづみ織タピストリーが掛けられている。白い鳩が舞い、緑の木々や花の溢れる杜の中に、一代目の奏楽堂が鎮座するという絵柄が織り込まれている。ちなみに旧奏楽堂が第二次大戦の戦禍に合わなかったのは、ハーヴァード大学のラングドン・ウォーナーたちの働きかけがあつて、米軍は奈良などの古都と同様、上野の杜に爆撃をしなかったためである。

奏楽堂の入り口正面には平山郁夫学長の原画による織つづみ織タピストリーが掛けられている。白い鳩が舞い、緑の木々や花の溢れる杜の中に、一代目の奏楽堂が鎮座するという絵柄が織り込まれている。ちなみに旧奏楽堂が第二次大戦の戦禍に合わなかったのは、ハーヴァード大学のラングドン・ウォーナーたちの働きかけがあつて、米軍は奈良などの古都と同様、上野の杜に爆撃をしなかったためである。

毎回、コンサートの休憩時間にはホワイエ側面の巨大なガラスの扉が電動で開けられ、上野の緑が目に入ってくる仕掛けで、聴衆は心身共にフレッシュすることが出来る。よそのホールでは味わえない魅力の一つである。夜は木々の緑がライトアップされ、一層彩りを増す。



戦時中の奏楽堂（屋根の上に見張り用の台が見える）

これまでの 企画展開



ホワイエ側面のガラスの扉は
電動で開閉できる

音楽活動の情報発進地となるべく、数々の新機軸のコンサートが催されてきた。

演奏芸術センター企画のコンサートでいくつか例を挙げると、全十一回の「奏楽堂開館記念演奏会」は一九九八年四月から六月にかけて行われた。いずれのコンサートも立ち見ができるほど満員の盛況であった。パイプオルガンのお披露目コンサートはその一年後に行われた。二〇〇〇年二月のオペラ公演《あだ》は、多彩なスタッフと演奏家による共同作業であった。美術学部伊藤隆道教授が舞台美術を担当、演出が観世榮夫氏、洋楽器と邦楽器による管弦楽は、邦楽科をもつまさに芸大ならではの企画で、とりわけ

邦楽科学生たちの生き生きとした姿が印象的だった。

二〇〇〇年シヨパン全曲演奏会
は、今は亡き名ピアニスト、ハリーナ・ツェルニーニステファンスカ（当時、本学客員教授）氏の監修でピアノ科の教官・学生が力を結集して、全十二回のコンサートを行ったが、回を追うことに話題を呼び、白熱した千秋楽になった。

「舞曲の系譜」シリーズにおける若杉弘教授のトークつきの進行ぶりと牧阿佐美バレエ団による実演は好評で、クラシック・コンサートの一つの新しいあり方を示唆するものであった。

また、ふだんは交流がないという各邦楽ジャンルの奏者が、流派の

垣根を越えて力を出し合った創作《熊野の物語》などは、守旧的になりがちな日本音楽界に新風を吹き込むものであった。

その他、音楽科が総力を結集する「うた」シリーズ（二〇〇一〜）、岡山潔教授の発案による「室内楽特別演奏会」ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏会シリーズ（一九九九〜）、「楽器シリーズ」（一九九〜）は二〇〇三年度もひきつづき行われる。古楽科の鈴木雅明助教授の監修による「オルガン＋」シリーズは、来年度は「上野の森音楽むかしばなし」というタイトルで装いを新たにすが、芝居と音楽によるユニークな切り口は変わらない。

6

今後の課題と可能性

奏楽堂は今や美術館と共に、芸大の「新しい顔」である。「日本の芸術文化の普及に大きく寄与することを目的とする」というその趣旨は、大学の施設として基本的なことである。

しかし、それだけでなく、二一世紀においては、社会に開かれた芸大の象徴として、奏楽堂に課せられた

使命は大きい。外部団体との共催にも、大学は積極的な姿勢を打ち出している。演奏芸術センター企画の催しは可能な限り土曜日、日曜日に行うよう運営されている。事務局側のバックアップ体制も円滑に動いている。

今後の展望としては、奏楽堂が音楽学部のなかに併設されているこ

とも積極的に打ち出しながら、しかし、二一世紀は地球規模で芸術を考える世紀ではないかと思われるので、海外の芸術活動に一矢を放つようなコンサート企画を打ち出してゆきたい。

（たきい・けいこ／演奏芸術センター助手）